

---

# G海軍航空隊

タゴサク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

G 海軍航空隊

### 【Nコード】

N9303Y

### 【作者名】

タゴサク

### 【あらすじ】

オレは・・・。

確か死んだはずでは？

オレは田中実と言う人間だった。

何故・・・Gになってるのだ？

オレはGだ。(前書き)

オレは・・・。

確か死んだはずでは？

オレは田中実と言う人間だった。

何故・・・G田になってるのだ？

オレはGだ。

オレは・・・。

確か死んだはずでは？

オレは田中実と言う人間だった。

趣味は戦記モノを読む事。

最近は減ったが異世界乱入モノも好きだった。

そんなオレが仕事帰りに一杯飲んで、フラフラと歩いてたら・・・。

目の前にダンブが・・・。。。

「アツ、オレ、オワタ・・・。」

そう思って当然だろう。

身体に強い衝撃を感じたのが田中実としての最後だったろう。

そのオレがどうして・・・。

「G田、総員起こしだぞ。タラタラしてたら指導教官に殴られるぞ。」

G田実となつてたのだ。

ここは広島の新田舎にある海軍兵学校。

オレはその中の海兵52期生徒として、ここに在籍してる。時は1925年。

同期の柴田武雄も今は仲が良い。今は・・・だがな。未来では彼とオレは対立してしまうのだ。

このG田と言う男は某43航空隊を指揮したり派手な経歴ばかり目立つが、

実態は「航空素人」だ。

少なくともオレはそう思ってる。

あの零戦が最後までコキ使われる原因となつたのも、コイツみたいな無能が中枢を占めてたからだ。

零戦の設計時にも散々な事をしてくれ、

おかげで大戦末期には特攻爆弾となつてしまったのもコイツが悪い。

少なくともオレはそう思ってる。

大体未来の航空機がマツハとなるのも想像出来ない人間だもんな。

余談だが、戦時中最高の艦載機はオレはグラマンF4Fだと考える。

小さい飛行機だが凡庸性も高く、簡易空母でも運用可能。

そしてコンパクトに畳めるあの翼。

アレがあれば……。

急増空母でも簡単に運用出来、対潜哨戒でも大活躍しただろう。

さて、もうすぐ我々はこの兵学校を卒業し、遠洋航海に出る事になる。つて。

後年、柴田と揉めなかったためにも彼とは親友になっておかないとな。

何せ数々のエースが彼を信頼してたのは有名な話だ。

G田は某43航空隊のみだし……。

「柴田、オレはこの航海が終わったら航空の道へ進もうと考えてるのだ。」

「G田、お前もか？」

オレも航空隊に入るつもりだ。」

「オレは戦闘機部隊に入りたいと思う。」

未来は絶対に戦闘機が軍隊の先端となるからな。」

「どうしてだ？」

「考えても見る。」

今の飛行機は誕生して二十年も経っていないのに、既に戦争兵器として大活躍してる。

特に戦闘機の性能向上は予想も出来ない程だ。

今はグルグル回るだけの格闘戦ばかりしてるが、

将来は爆撃機も偵察もすべて一機種で賄える日が来る。  
オレはそう確信してる。

そのためには戦闘機を今のウチに手に入れ、海軍の中枢に育てるべきだと思っただ。」

「フム。。。凄い考えだが・・・。

確かに飛行機の性能向上は凄いと思う。

フワフワと飛ぶだけだった飛行機が、

ここまで性能が上がるとはライト兄弟も予想してなかったらう。

先の大戦では完全に戦争の末路も決めたとしな。」

「それにだ。

今は馬力が無くて頼りないかも知れぬが、

戦闘機のパワーが上がれば手の届かない超高空にも駆け上げれる。

速度も上がる。

パワーがあれば出来ない事は無くなるぞ。

パワーがあれば燃料も多く搭載出来るから、航続距離も伸ばせる。

そして、爆撃にも重い爆弾を抱えられる。

戦闘機だから爆弾を捨てたら敵機にも歯向かえれる。

爆撃機では出来ない芸当だぞ。

これなら護衛ナシでも敵陣深く侵入可能になると思わないか？」

「凄い。

確かに馬力が上がれば重い爆弾も抱えられるし、高い空も飛べる。

何よりも速度も上がるな。」

「柴田、オレと一緒に航空隊の未来を開発しようぜ。」

「G田、オレも戦闘機に乗るぞ。」

若い彼等が熱い話をしてるのを影から高野五十六が覗いてたのを彼等は知らない。

「フフフフ。素晴らしい話だ。

確かに馬力が上がればあの頼りない飛行機も活用可能となるな・・・  
帰国したら彼等を早速航空の道へ引き入れないと・・・」

G田となった田中は柴田との交遊の道を得て、  
未来の険悪な関係とは途絶する事になった。

（ヨッシャ！！）

これで坂井センセや未来の部下から輦蹙買わずに済むぞ。  
零戦も絶対に馬力中心で活用させないと。

オレの持つ未来の戦闘機のデザインも各航空機会社に渡さないとい・・・  
！）

G田実となった田中実は心で未来の海軍航空隊を画いてた。



オレはGだ。(後書き)

本作の主人公は後年、嫌われたりルメイを表彰したりG田艦隊と陰口を

叩かれたアノ人ではありません。

多分・・・。

後年、某エースから嫌われたり、  
戦闘機無用論を提唱した人物とは一切関わりはありません。

多分・・・。

なをこの作品は完全に趣味に走りますので、実在の兵器や歴史とは  
全くリンクしません。

山本五十六も高野五十六として旧姓で出します。

今日も飛ぶ飛ぶうう。(前書き)

いよいよ霞ヶ浦です。

今日も飛ぶ飛ぶうう。

命惜しまぬ予科練のおお、ななつボタンは桜に錨。  
今日も飛ぶ飛ぶうう。。。

やあ、オレはG田となつた元、太田実だ。

ようやく遠洋航海も終わり、士官パイロット候補生として霞ヶ浦に  
来てた。

時は1927年（昭和二年）。

柴田と共に、いよいよ俺達は霞ヶ浦で航空実習を受ける事になった。  
余談だが、兵学校出身の教官と兵上がりの下士官では呼び方が違  
うのだ。

士官は教官、下士官だと助教と言う具合にな。

テクニクは間違いなく下士官が良いのに何故??

オレが海軍を仕切れる立場になったら、絶対にこの制度は変える。

学校を出たばかりのオレ達みたいなボンボンが  
歴戦のパイロットを率いるなんて冗談では無い。

「柴田、今のパイロットの育成制度をどう思う?」

「ん??どつて??」

「おかしいと思わないか?」

まだ素人のオレ達が分隊士とか呼ばれ、歴戦のパイロットである下士官搭乗員を

アゴでコキ使ってる状況だよ。」

「確かにな。

オレ達みたいな素人が歴戦のパイロットを使えるのもおかしい。

どうなってるのだ??」

「恐らく古くからの悪いしきたりが今も続いているのだろう。

特にパイロットでは絶対に修正すべき制度だ。」

「そうだな。歴戦のパイロットをムダに死なすかも知れないしな。」

「ウム。そのためにもオレ達だけでも彼等の信頼を得ておくべきだ。

」

「ああ、未来の部下でもあるしね。」

士官待機室でオレ達は話し合ってたが、オレ達の話了他の士官は全く聞いていなかった。

そして三式初歩練習機の前部シートに座り、後席の助教の下士官パイロットから指導を受けてた。

「G田少尉、宜しくお願いします。

黒岩一空曹と申します。」

古参パイロットの黒岩紀雄がオレの指導教官だった。

「黒岩一空曹、G田少尉です。宜しくご指導お願いします。」

「し、少尉……。私如きに丁寧な挨拶など不要ですよ。」

「とんでもない事です。空を飛ぶ事に関しては私はド素人。プロの貴方に教わるのですから、キチンと挨拶だけでもしておくのは当然でしょう。」

黒岩はビックリしてた。

大半の……と言うか、

士官候補生の連中は下士官には呼び捨てで、どこのバカ殿かよ？と言いたくなる連中ばかり。

逆らっても彼等の方が階級も上。

間違っても彼等を批判すれば昇任も阻害されてしまうのである。

飛行時間が既に二千時間を越えてる黒岩にしても同じであった。

それなのにこのG田と言う少尉は……。

下士官の自分にキチンと挨拶やお礼を言う。

コレが兵士なら当然なのだが、仮にも士官だ。

未熟でも士官。

その士官から挨拶を受けるとは……。

黒岩は感動してた。

「G田少尉、ありがとうございます。この黒岩、G田少尉のためにも誠心誠意を持ち、持てる技術はすべてお伝え致します。」

「黒岩一空曹、宜しく願います。

それと訓練が終わった後で構いません。

滑走路脇で助教の皆様を集めて頂けませんか？」

黒岩はそら来たと思った。

我々を修正する気だろう。  
だが来いと言われたら例え親の葬式でも集まらないといけないのが  
軍隊だ。

「分かりました。1700以後なら大丈夫です。  
全助教を集めておきます。」

「緊張しなくても大丈夫ですよ。  
親交を深めたいだけです。それと色々と言われたいと思ってるのです。  
酒補や隊内だと色々と言われると思いましたので。」

ハッターヤアコ  
修正を覚悟してた黒岩だったが、G田の話にはビックリさせられて  
た。

親睦を深めたいだけ??  
今までの士官候補生だと、我々を見かけたらバカにするか、殴るだ  
け。  
それが。。

「G田少尉、全パイロット(下士官兵)を集めておきます。  
我々の持てる知識や技術はすべて話します。  
宜しく願います。」

「コチラこそ。。。  
そろそろ発進しないと。。。」

「オツ、後がつかえてますね。では、富士山、筑波山八の字飛行発  
進。」

私が最初は操縦しますので、手足は離してください。」

「了解です。黒岩一空曹。」

やがて三式初歩練習機はスルスルと滑走を始め、フワリと霞ヶ浦の空に舞い上がった。

（柴田も同じ事を頼んでるだろうな・・・。）

G田は僅かずつでも下士官兵と交流を持ち、  
彼等の親交を得て後の海軍航空隊の要とするつもりだったのだ。  
パイロットの大半は下士官なのだからな。

G田と柴田は共に下士官との交流を持ち、一日でも早く技術の習得。  
そして海軍航空隊の発展を進捗するのだ。

今日も飛ぶ飛ぶうう。(後書き)

ようやく霞ヶ浦です。



## 霞ヶ浦（前書き）

まだ訓練途中です。

## 霞ヶ浦

もう田中です・・・とは言わなくても良いでしょう。

G田です。

現在、霞ヶ浦の滑走路外柵近辺で下士官との親交を深めております。いや、歴戦の搭乗員の方の目って恐いですね。

階級と言う傘が無かったらとても対等には話せないと思います。

「皆さん、こんばんわ。

今度、この霞ヶ浦で初歩訓練を受ける事になりました、G田少尉です。

コチラは同期の柴田武雄少尉です。宜しくお願いします。」

「柴田少尉です。空を飛ぶ事に関しては皆様に教わるしか無い人間です。

宜しくお願いします。

それと・・・

これはホンのお近づきの印です。良かったら皆さんで分けてください。」

オレと柴田は持参した袋を彼等に手渡した。

中身は高級タバコの本マレだ。

酒でも持ち込もうと思ったが、まだ巡検前。

休みならともかく平日にはマズイと思い、タバコを二人で金を出し

合い、彼等に

プレゼントしたのだ。

ワイロとは違うからね。

「G田少尉、柴田少尉、頂いても宜しいのですか？  
こんな高級タバコを??」

「もちろんです。皆様には後は指導して貰うのですから。」

そう言うと彼等はワイワイ言いながらホマレを分け合います。パスパと吸い始めた。

そして黒岩一空曹が先陣を切り我々に挨拶を始めた。

「G田少尉、柴田少尉。先任搭乗員を勤めております黒岩です。」

お二人の指導は我々が責任を持ち、初歩からキチンと指導致します。

「黒岩さん、宜しく頼みます。他の皆様も訓練では遠慮無くシゴいてください。」

さすがに外部の目がありますので、飛行中のみをお願いしますけど。

「そう言うと彼等はワハハハと笑い、「承知しました。」と応えてくれた。」

そして彼等の実戦の話なども聞くと・・・。

まだ、大戦に出たパイロットは数が殆ど居なく、唯一、上海方面で独逸と戦ったのが、黒岩だそうだ。

ドイツのアルバトロスは中々手強かったとか・・・。

「フム・・・やはり実際に戦った方の話は違いますね。」

所で皆様にお聞きしたいのですが、将来の我が海軍航空隊には、今のパイロット育成制度で

間に合うと思いますか？」

彼等はガヤガヤと話し合ってたが・・・。

「G田少尉、コレは内密オフレコでお願い出来るなら話しますが。」

黒岩が代表で自分に話しかけて来たのだ。

「モチロンです。オレと柴田だけの心にとどめておきます。」

「それならお話しします。」

自分は先の大戦で撃墜したドイツのパイロットと話し合いをした経験があります。」

「ほお、興味深いですね・・・。」

「ハイ。現在、世界の戦闘機はドイツ、アメリカ、イギリス、フランスがトップクラスです。」

特にドイツは敗れたとは言え、素晴らしい新鋭機を続々と出しました。

東洋では殆ど戦果も無かったドイツですが、欧州では凄い活躍をしています。」

特に赤男爵レッドバロンと呼ばれた英雄も出てますからね。」

赤男爵レッドバロン>某二輪屋ではありません。>は本名、リヒトフォーヘンと呼ばれる先の大戦最大の英雄だ。

80機以上の撃墜数を誇るエースと呼ばれる英雄だった。残念な事に大戦末期に戦死してしまったが。

「その彼等と色々与会話して分かったのですが、ドイツでは敗戦さ

え無かつたら、  
次の世代の戦闘機の開発も出来てただろうとの事です。」

「次の世代の戦闘機??」

「ハイ。翼は低翼単翼。ひたすらパワーを求め高い空を飛べる戦闘爆撃機と呼ばれる機種を開発してたらしいです。」

「興味深い話ですね。」

「そんな飛行機で戦闘任務が出来るのか?と聞くと、彼等はパワーさえあれば可能と

断言していました。今の戦闘形態は二十年以内には滅びると予想もしてました。

ドッグファイトばかり求めては貴重なパイロットの命がいくつつあっても足りないとも。」

フム。。。

オレの計画とも一致する予言だな。

まさかドイツにもオレみたいな転生者が居るのか?

いや、居ると思う方が良い。

何事も想定しておかないと某原発騒ぎみたいな事態が起きたらフリーズしてまうぞ。

特にオレ達は軍隊だ。

常に最悪の事態を想定しておくべき。

備えあれば憂いなしと言うでは無いか。

その後彼等と色々と懇談し、今すぐは不可能だが、出来る限り下士官の優れたパイロットの

昇進を早める制度を上層部に具申すると約束した。

こんな凄腕パイロットが居るのに、素人士官に一番機を任せてた海軍……。

いや……。

日本軍は頭が狂ってたとしか表現が出来ないぞ。

絶対に腕Ⅱ階級にしないとね。

腕のあるパイロットが指揮したら、負け戦でも退却が可能となる。

勝てる戦も確実性が増す。

そのためにもオレ達が努力して、彼等を昇進させないとね。

その後、滑走路脇での懇談会はオレ達二人が修業するまで続けられた。

そして彼等とは部隊が違っても話し合う機会を持てた。

何とか一日でも早く具申できる階級にならないとね。

## 霞ヶ浦（後書き）

G田とは違う生き様となるG田です。  
下士官パイロット軽視は日本海軍最大の愚行でした。

G、フチ撒けてまう。(前書き)

いよいよ航空参謀としてGが暗躍を始めます。



G、ブチ撒けてまう。

オッス。

オレはGだぜ。

所でどうしてGと呼んでるか分かるかい？

この世の全女性が大嫌いなGと言う黒光りするアレを連想させるからだよ。

その位、現実のGは大嫌いなんだーい。

まあ、それは置いて置いて・・・。

霞ヶ浦の練習機過程を終えたオレと柴田、淵田は共に戦闘機要員として横須賀に来てた。

時は昭和三年、まだまだ複葉機全盛は続いていた。

下士官なら佐伯とか大村なんだろうが、この頃は横須賀で戦闘機過程を練習させてたのだ。

(実際の歴史とは全然違います。)

何故、パールハーバー攻撃隊の指揮官となる淵田が戦闘機要員に居るかって？

口説いたからだよ。

未来は絶対に戦闘機が海軍のトップに来るからとね。

そのためにも有望な指揮官は近くに居て貰わないと・・・。

「G田、いよいよオレ達も指揮官としての道を歩くんだな。」

「淵田、オレ達は指揮官としてでは無く、参謀として戦闘機隊を指揮するのが目標だ。」

「へたくソなオレ達が空を飛んでも飛行機を壊して減らすだけだろうか。」

「ワハハハ。違い無い。」

「オレ達の仕事は下士官パイロットをいかに育てるか？だな。」

「ウン。それと戦闘機の開発だ。」

「とにかく一日でも早く参謀への道を見つけ、海軍航空隊を育てよう。」

「G田、高野司令がオレ達を呼んでるぞ・・・。」

「お前、司令に何かしたか？」

「イヤ・・・。そもそも司令とは縁も所縁も無いぞ。」

高野司令とは別世界では山本五十六となったアノ人の事だ。

この世界では養子に入らず、高野のままらしい。

日本海海戦でも負傷しなかったらしく、指も五本揃っています。ハイ。

「G田中尉、以下二名、入ります。」

「ウム、入れ・・・。」

「失礼しまああす。」

「初めて会うが、私が横須賀航空隊司令、高野五十六だ。G田くん、柴田くん、淵田くん。まあ座りたまえ。」

司令の指示により、オレ達は椅子に座らせてもらった。

「時にG田くん。キミは霞ヶ浦では中々の好成績を収めてたらしいな。」

「いえ、助教の指導が素晴らしかっただけですよ。彼等の指導でココまで来れました。」

「フム……。時に君達とは会うのは実は二度目なのだよ。」

「と、言いますと？」

「君達とは遠洋航海でも同じ艦に乗ってたのだ。私は。」

「そうでしたか……。」

「まっ、茶飲み話に付き合わせるために君達を呼んだのでは無いから安心したまえ。」

「ハイ。了解しました。」

「あの航海の時、そこに居る柴田クンとキミは面白い話をしてたね？」

ヤバ……。聞かれてたか……

「は、ハイ。」

「未来は戦闘機が中心となるともね。」

「ハイ。その通りです。」

現代の戦闘機を見てたら信じられないとは思いますが、馬力さえ上がれば、

殆どの航空戦闘は戦闘機だけで行える時代が来ると私は確信しています。」

どうせ併行世界だ。

思った事をブチ撒けてしまええええ。

「どうしてそう思うのだ？」

「所で高野司令、貴方は山本家に養子の話が来た事は無かったですか？」

「何故……。その事を他人のキミが????」

高野は動揺してた。

今まで突っ込まれて慌てた彼から我が家の事情を逆に質問されたから。。。

「柴田、淵田、今から途方も無い話をするが発狂してるとは思わないでくれ。」

「お前の話を信じない訳が無いだろう。例え月が落ちて来るとか言

われても、

オレはお前を信じる。」

「オレもだ、G田。」

「ありがとう。柴田、淵田。高野司令、これからの話は内密オフレコでお願いします。」

「フム……。良いだろう。それにしてもキミ達は仲が良いのだね。同期と言えば競争相手でもあるだろうに。」

「未来の海軍航空隊の要となるのが我々三人ですから。仲違いするのは勿体無い事です。」

「そりやまた大きく出たモンだね。どうしてそう思うのだ？」

「司令、絶対に信じられないとは思ってでしょうが

、私は約八十年後の未来から生まれ変わった男です。

名は田中実と言います。

住居は横須賀市 町 番地。

生年月日は昭和五十六年八月十五日です。そして逝年、平成二十年九月十日です。」

「八十年後の未来から生まれ変わった男だと？  
しかも・・・平成とは？」

「現人神であらせられる現天皇陛下様がお隠れになった後、現皇太子であらせられる

明仁親王様の時代の称号です。

西暦ですと1989年です。」

「フム……。と言う事は現天皇陛下様はかなり長くご在位されるのだな？」

「ハイ。歴代でもトップクラスの在位期間だったと思います。」

「で、どうしてそんな事を私達に告げる気になったのかね？」

「隠しても意味が無いと思ったからです。」

「どうしてか？」

「司令、今の海軍、陸軍の対立で国力が成長出来ると思いますか？」

「フム……。確かに陸軍と海軍は仲違いし、予算の盗り合いばかりしてるね。」

「その通りです。私の知る世界では、1945年。

つまり昭和二十年の八月15日までその時代が続きます。」

「また具体的な日にちが出て来たね。その日は意味があるのか？」

「モチロンです。その日。」

「日本帝國は滅びるのですから……。」

「帝國が滅びる??？」

「ハイ。」

「日本帝國は欧米連合軍と闘い、数の力に圧倒され日本は完全に廃墟となり敗戦します。」

今のままでは確実に。」

高野は驚いてた。

まさかこんな途方も無い話が出て来るとは思わなかった。単に面白い話をする部下から今後の戦闘機に付いて質問したいだけだったからだ。

しかし私の身内の事情まで知られてるとは・・・。  
信じるかどうかは別にしても、聞く価値はあるな・・・。

「フム・・・。ではそのキミの知る話を聞かせてくれるか？  
もちろん単純に信じる事は出来ないが。」

「モチロンです。狂人と思われても仕方ない話ですからね。」

さて、この田中実が憑依してるG田実と言う男ですが、私の知る世界では・・・。

柴田、お前とは徹底的に対立してたのだよ。」

「どう言う事だ？G田、いや・・・田中・・・か？」

「G田で良いよ。柴田、お前は十年後の未来では戦闘機部隊の指揮官として前線ばかり

渡り歩く事になってる。淵田は攻撃機隊指揮官だ。

そしてオレ、いやG田は・・・。

空母航空隊参謀として働いてた。

空母部隊の指揮官となるある方が、航空機に無知だったため、G田の指示が一方的に通り、

後年はG田艦隊と呼ばれる程だった。

だがG田は無能では無いが愚かだったのだ。

戦闘機無用論とか提唱し、貴重な戦闘機搭乗員を削減したり、十二試艦上戦闘機開発に

ムチャな性能を求め発展性の無い戦闘機を作らせてしまった。  
柴田との対立は戦後も続き、G田が戦後の空軍となる航空自衛隊に  
入隊したら、

オレと同じ釜のメシは二度と喰いたく無いと断り、生涯操縦桿も握  
らなかった程だ。」

「フム……。中々凄い話だね。G田君。

そろそろ定時となるが。話の腰を折りたく無い。  
キミ達、今から時間は大丈夫かね？」

「『『モチロンです。司令。』』」

「では場所を変えて徹底的にG田君の話を聞く事にしよう。」

そう言うと司令は電話を取り、副官に我々の処遇を指示し我々は司  
令と一緒に航空隊近辺にある、  
料亭へと向かう事になった。



G、ブチ撒けてまう。(後書き)

G君、ついにブチ撒けてしまいました。

エンジンの音おお（前書き）

いよいよGが動き始めます

## エンジンの音おお

エンジンの音、轟轟とおおお。

オッス、Gだぜ。

もうGで良いだろ？

時は昭和四年。

後に名設計技師となる堀越二郎も俺達とほぼ同年代だったのだ。少しビツクラ・・・。

さてオレは今、三菱の大幸工場に来てる。

星型空冷エンジンの工場だが、ここは後年ドラの本拠地となるのだ。今は工場地帯だがな。

今回は未来のハイパワーエンジン開発を具申するために大幸に来た。た。

パワーこそが命よ。

パワーがあれば飛行機は何でも出来る。

重い爆弾でも重武装でも。

そして大量のガソリンも積める。

重装甲も可能だ。

機体のデザインは既に伝えてあるので、後はエンジン・・・だよな。中島にも伝えたが、アチラには栄の詳細を話した。中島知久平が食いついて来たのには大笑いしたぞ。

横須賀のアノ夜はとんでもなく熱い夜となった。

オレは柴田、淵田、そして高野司令と共に一夜を熱く語り合った。

高野司令は陸軍のボケ共から航空部隊を取り上げ、代わりに戦車部隊の充実を確約させると言ってくれた。

海の上を飛べないパイロットなんて日本には不要だもんね。

日本は海に囲まれた国だ。

柴田と淵田はオレの発言に驚きはしたが、オレに付いて来てくれると言ってくれた。

本来のGだと、柴田とは徹底的に対立するのだが、今のGでは対立する理由も無い。

柴田もオレの意見に全面的に賛成してくれたから。

淵田も本来進むべき攻撃隊指揮官の道を蹴り、戦闘機隊参謀として働き始めてくれた。

オレは自分の持つ未来知識と未来の戦闘機、特にここ十年以内に登場する世界の主力戦闘機の詳細をすべて彼等に公開すると約束した。

今は頭の中にしか無いので、まずは正確に図面にしないとね。

中々苦心したが、出来上がったすべての図面を高野司令に渡すと彼は。。。

「凄い。

今までは半信半疑だったが、コレを見たら信じる事も出来る。

Gくん。

キミを私付けの参謀として登用しよう。

他の諸君もだ。」

ヨッシャ、コレで参謀への道が開けたとおお。

高野指令のお墨付きを貰えた俺達は戦闘機参謀の肩書きを付けて貰い、

分散して各地の航空隊、そして航空機製造会社を訪問。

今後の方針の指導に歩き始めた。

当初は彼等から「また甲板士官が庶民を苛めに来たぞ。」と、冷やかな目で見られてたが、今では彼等も私達を信頼してくれてる。既に三菱、川崎、中島、川西は陸軍では無く海軍を信頼してくれてる。

おかげで陸軍の戦闘機の開発は頓挫し始めてた。作る会社が無かったら、そりゃね・・・。

ついでに言うけど自分は陸軍のパイロットの技術は否定してないよ。特に加藤隊長なんて不世出の名指揮官と今でも思ってる。

ただ陸軍の参謀の大半がヴオケなのよ。Gとタメ張りますね。

ウン。

本来のGはどうもオレがコチラに飛ばされたせいでオレの身体と入れ替わったみたいだ。

気づいたら棺桶なんてね。

恐らく神風特別攻撃隊の勇士の怨念だろう。

ザマーですよ。

ホホホホホ。

戦後も靖国にロクに参拝もせず、ルメイを表彰するわ、ロッキードから裏金を貰ってるわ。

多分ですけどね。

旧帝國海軍最大の裏切り者はGと元台南航空隊の飛行隊長のNだわ。ヤツは鬼の西沢も殺したしね。

彼もゼロ戦を取り上げられなかったら絶対に死んで居ない人間だ。

Nのヤローが西沢の愛機を取り上げたせいで、彼は死んだ。

オレは絶対に名パイロットは大切にするとおお。

そのためにも予科練の制度も今のウチに整備しておかないと。

オレは三菱に頼み込み、十年計画で、とにかくハイパワーエンジンの開発を頼んでた。

「お願いします。」

海軍の未来はハイパワーエンジンの航空機にかかっているのです。ムリは承知です。

失敗も繰り返すとは思いますが、何とか十年以内に二千馬力のエンジンの開発をお願いします。

もちろん最初は千馬力程度で構いません。

ですが、それをテストベッドにして、十八気筒化すれば……絶対に二千馬力は達成出来るハズです。」

「G中尉、分かりました。」

失敗を前提にして頂けるなら、

十年以内に二千馬力のエンジンの開発は可能だと思います。ただ……。」

「モチロン海軍は全面的に支援します。」

ハイオクガスも五年以内には百オクタンを標準化する予定です。そのための製油所も徳山に建築中です。

技術者も帝國大学から優先的に回します。」

「分かりました。それでは、早速取り掛かります。」

進展したら即座に海軍航空本部に連絡します。」

「宜しくお願いします。」

さすが日本の技術者だ。

コチラが誠意を見せればキチンと答えてくれる。目標も明確にしたら達成は可能だろう。

絶対に零戦みたいなムチャな相反する要求はしないからな。  
フフフフフ。。。

## エンジンの音もお（後書き）

Gが暗躍し、海軍の航空機技術がチート化し始めます。



(閑話) 灰色男(前書き)

某小説に良く出る灰色男の出現です。

(閑話) 灰色男

Gです。

ハイパワーエンジンの開発ですが、周辺機器の開発で苦労しております。

エンジン自体は出来ても、プラグ、ハイテンションコード、パッキン、インジェクションと言う、

エンジンを構成するのに必須な周辺機器がわが国は遅れてるのですよ。

コレって十年で出来るのか・・・。

< G君、いや田中君、苦労してる様だね・・・ >

突然、オレの目の前に灰色の男が出現したのだ。

アンタ誰??

< 驚かせてすまないが、私は敵では無い。

君が生前良く読んでたアノ手の小説の異界の人間とも思ってくれ。名前は・・・。

そうだな。灰色男とも呼んで欲しい。 >

やはり出たか・・・。

オレがこんな事してたら、絶対に出ると思ってたが。

まあ良い。使えるなら使おう。

どうせ併行世界よ。

灰色男さん、始めまして。

田中改めのGですよ。

所で、もしかして・・・。

<ウム。私が君をこの世界に飛ばせた張本人だ。>

やはり・・・。

何らかの強い関わりが無い限り、

例え魂でも時代を飛び越えるなんて不可能だからな。

ついでだ。

無いモノを何とか出来ないか頼んで・・・。

<G君、既に君の願いは適えておるぞ。>

どう言う事???

<君の考えてる周辺機器はすべてマザーマシンからインゴッドに資材に現物。

そして設計図までPOしてココに在る。>

おおおお。

さすがチート。

コレがあればハイパワーマシンも開発可能となるな。

あんがとおお。灰色男さん

<放置して置くと、現実日本みたいに敗戦は必須となるつ。

この悲劇を繰り返すべきでは無い。

日本は古き日本のまま時代を越させるべきだ。>

その通りです。灰色男サマ

日本はけっして愚かな国では無かった。  
一部のトップが愚かだっただけの事。  
このGも愚かでしたけどね。

<ウム。その通り。

お前と入れ替わったG本人はお前の予想通り・・・>

あぼ〜んしてしもたのですね。  
オレの代わりに。

<傑作だったぞ。入れ替わったお前となったGは突然ダンプに轢き  
殺され、

それでも魂は身体から離れる事も出来ず痛覚の残ったまま火葬され  
てしまったのだ。>

うわ・・・。そりゃ残酷

まあ特攻隊の勇士の皆様の痛みに比べれば、まだ軽いモンでしょ

<ウム。ついでにお前の近所に住んでた天才博士、田島正も転生さ  
せたぞ。>

何かヤな予感するのですが・・・。  
まさかアノ方にですか？

<その通り。N島正だ。>

たしか田島は元気だったハズですが・・・。

<お前の事故から数年経過した時に火事に逢い自宅が全焼してしも  
たのだ。

どうせならと・・・>

N島と入れ替えたんですな。

このオニ

<フッフフ。楽しい仕事だったぞ。

特攻隊の勇士の怨念も彼を喜んで焼いてたからな。>

そりゃヤツは特攻隊の勇士を散々見送ってて、

自分はノウノウと戦後を謳歌してましたからね。

恨まれて当然ですよ。

<まあヤツ等は処理した。

既に地獄でも業火に焼かれてるぞ。

さて今後の方針だが、基本的に私はお前のみ援助する。>

灰色男様、私のお尻ならお貸ししますわ。

<キモイ。吐き気するから言っつな。>

援助っつーから、身体が目的と思ったのにいい。

<黙れえええ。オレはノーマル。

綺麗な姉ちゃんが好きなの。

ハアハア・・・。

ああ、言い忘れてたが、お前の部屋のみにPCとプリンターを設置しておいたからな。

もちろんネットも繋いである。>

ヤッファー

二度とPC触れないと思ってたのいい。

あんがとおお。灰色男様

< 消耗品は定期的に仕入れて置くぞ。 >

助かります。

< 私の事は極力バラすなよ。

歴史の修正力が怖いから・・・ >

了解っス。

しかしコレで楽になるな・・・。

図面も手書きでは無くカラーでキチンと作れる。

< この程度してもアメに勝つのは難しいだろうからのぉ。 >

そうっスね。

アメの工業力はハンパでは無いから。

ヤツ等に勝つなら、せめて二十年は時代を先取りしないとムリですよっ。

< ウム・・・。そろそろオレの具現化の時間の限界が来たらしい。

オレは消えるが、今後も相談したい時はメールでも入れてチヨ。

PCにアド入れておいたからね >

アッ、本当だ。

灰色男としっかり入ってる。

< Gよ、頑張れ。アメを叩き潰し、陸助を叩き直せ。

そのために・・・お前達をこの世界にトバセタノダ・・・・・・・・>

灰色男はそう言いながら消えて行った。

胡散臭いが、使えるモノは何でも使わないとね。

しかしPCか・・・。

うれしいなあ。

この世界でもネット出来るなんて、ホンマにGちゃん感激いい

(閑話) 灰色男(後書き)

やはり出しました。

ネ申ならぬ灰色男です。

Gはどうするのか？



## ゼロ戦（前書き）

零戦（仮名）が誕生しました。

## ゼロ戦

Gです。

灰色男のプレゼントにより、今後の作業が凄く楽になりました。

まさかこの世界でネットが出来るとは・・・。

おかげで大半の設計図も入手出来ました。

POした設計図や計算書を各メーカーに渡したら、ビックラされましたよ。

おかげで日本の戦闘機、爆撃機の歴史は爆発的に変化しました。

余談ですが、陸軍から航空隊は消えました。

高野司令が「陸には日本の航空部隊を指揮する資格は無い。」と断言し、

航空製造権、その他はすべて海軍が独占。

パイロットの養成も海軍のみで行う事に。

ついでに、陸軍の徴兵制度も「赤紙」一枚で徴兵出来なくなりました。

何故？

天皇陛下様に併行世界での陸軍の悪行をすべてDVD付きで暴露したからですよ。

航空機製造会社からも無断で徴兵し、

日本でも数人と言われた熟練工を徴兵してたのは有名な話です。

陸助には地べたで走り回るだけがお似合い。

予算も陸が三、海軍が七と言う具合です。

恨まれましたが、おかげで226事件とかのクーデターも起こりそ

うにないです。

だって、陸の訓練とか教練には必ず民間からの監査が入る様になったのです。

ヘタを撃つと、陛下からのお叱りが下ります。

ムダ口とか搭乗なんかもクビにされましたしね（大笑い）。

ついでにシナへの進駐の取りやめや満州からも撤退しました。

アレも陸助が大半の仕掛け人でしたからね。

半島は放置です。ハイ……。

アレとは関わりを持たないのが一番です。

攻めて来たら???

今の日本なら南北東でも返り討ちですよ。

投資した公金はドブに捨てたと思って諦めて貰いました。

どうせ同士討ちで破壊してしまいますからね。

関わらないのが一番です。

それよりも北方領土ですよ。

ナンでも油田とかあったみたいで……。

満蒙開拓団の連中を北方領土に送り、アチラで油田の採掘をしてもらっております。

これがうまく逝けば……。

開戦も相当遅らせる事が可能となりますよ

陸助やその他の事はこの程度にして置いて……。

ヤッファー

ついに昭和七年の段階で零戦（仮名）が完成しました。

既にこの世界では間違いなく世界最強でしょう。

パワーユニットは金星エンジン搭載の1500ps。

速度は580km出ます。

このままでもこの世界では当分困りませんが、我々の野望は止まりません。

「高野少将、ついに零戦が完成しましたね。」

「ウム。併行世界の究極零戦が既に昭和七年の段階で完成するとは。

G、お前のおかげだ。

感謝する。」

「まだまだですよ。この程度で満足してたら我々は負けてしまいません。

ここ十年が勝負なんです。欧米を今の内に引き離しておくべきです。」

「そうだな。併行世界の私もパールハーバー攻撃の見た目の戦果に騙されて・・・。

多くの民を死なせてしまった。

Gから見せて貰った廃墟の日本を見た時はさすがに卒倒したぞ。

アレが自分の仕出かす未来かと思うとな。」

「その通りです。」

所で大和は止められなかったのですよね？」

「ウム・・・。艦船の建造計画はどうしようも無かった。

アレは使い道あるかな？」

「防空戦闘に特化した仕様にしたら戦艦は使えますよ。空母の直属護衛として戦艦は使うべきです。そのために対空砲火も充実させておきましょう。」

「そうか・・・。」

「んじゃ、その設計図は何とか出来るか？」

「・・・。。調べておきます・・・。。。」

高野さんもすっかり染まったな。

オレは某青いタヌキネコみたいに思われているのか？  
まあ色々とやってしまったから・・・。  
だが後悔はして無いぞ。

余談だが、柴田は予科練の司令をしてもらってる。

淵田は空母航空戦隊の指揮だ。

二人共、常に最新情報を優先的に回してるから、  
作戦や演習も常に最悪を想定しても勝てる参謀となってた。  
彼等にはPCで未来の情報も教えてある。  
親友だしね。

例えば夜間、寝てる時に敵機が低空から攻めて来て、  
基地が壊滅的打撃を受けた。

それでも地下に格納してる新鋭機で敵を叩き潰せる。  
対空砲火も地下に格納してあるのだ。

八木博士とか盛田博士などをレーダー開発に回し、  
外国に八木アンテナの特許を

持って逝かれるのも防げた。

八木アンテナって知ってる？

UHFみたいな形のアンテナだが指向性がムチャクチャ高いのよ。初期のリーダーは大半が八木さんのアンテナだったのは有名な話。無能軍部がリーダーみたいなイロモノは要らないと八木さんにNOを言い渡し・・・。

彼は仕方なく海外で特許を取り、海外の軍隊が美味しく使わせて貰ってたのだ。

アホだよな・・・。

今は平和だが、十年以内には戦争の真っ只中に放り込まれてしまう哀れな子羊国家の日本には、とにかく時間が足りない。

シナから手を引いたり、半島を放置したり、満州からも撤退したがそれでもアメは我々に牙を剥くと思う。それも確実に。

まずは国力だ。

大馬力のエンジンは現状では1500馬力が限界。どうしてもケルメットとかクランクの鑄造が難しいのよ。

こればかりは経験が必須。機体に関してはすべての図面を国内メーカーに渡し、必要な機種のみを作成して貰う予定だ。

もちろんそのままで作るのでは無い。

キチンと強度を計算し、ムリと事故の無い飛行機として貰うのだ。

さて・・・。

完成した零戦は皇紀の年号での命名とはせず、歴史通りのゼロ戦として採用。

海外の連中も招き盛大に宣伝したった。

何故って???

売るためですよ。

いやああ、フランスとかイタリアが見事に食いつきましたね。タイも一応、独立国ですから欲しそつでしたが、金が無いとか・・。かわいそうなので金では無く、作物や掘り出した鉱石、原油との交換としました。

アメモシヨックを受けてましたね。

まさかこんな東洋の島国がこんな最新鋭機を開発出来るとは夢にも思わなかったでしょう。

あつ、売るのは友好国のみでっせ。

アメにも一応は売りました。

エンジンは劣化版の金星を付けてね。(笑)

「高野中将、売れましたね」

「ウム。アレだけの名機だ。そりゃ売れるだろう。」

「まあ、ベースの機体とは別にエンジン、武装はオプションとしましたけどね。

さすがにあのマンマでは売れませんよ。」

「そのオプションとやらも我々には優位となつたな。」

「ええ、何せ同じゼロでも輸出ゼロと本家ゼロでは性能に格段の差が出るのですから。」

「ムフフフフ。」

まあ、それでもこの時代の戦闘機としては破格の破壊力があるぞ。輸出ゼロも・・。」

「コチラはさらに先を歩けば良いのですよ。」

もう烈風はラインに乗ってますからね。」

「烈風は凄いな。

アレぞ戦闘爆撃機として使えるであろう。

パワーもありタービンも搭載。

また与圧室は出来て無いのだろうか?」

「ハイ。さすがに与圧室は簡単ではありません。

ですが、開発は続行してますから、五年以内にはラインに乗せられると思います。」

「頼むぞ、G。」

ゼロ戦が売れる事により、我が国は輸出で工場は大忙しとなった。

満蒙開拓団の連中も帰国し、国内の工場で雇用され国内の需要は潤い始めてたのだ。

まずは国だよな。

戦争の準備も大切だけど。



## ゼロ戦（後書き）

ゼロ戦は輸出商品として売り出します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9303y/>

---

G海軍航空隊

2011年11月29日23時54分発行